

石田梅岩に見る儉約・布施の真意

山 崎 益 吉

The true meaning of “Saving theory” in Ishida Baigan.

Yamazaki Masukichi

Summary

We only realize that Baigan’s saving theory can be understood together with “offering” (Fuse). After Toya lake Summit in Hokkaido, saving has become much more important in global environmental problems. Baigan says “use two things instead of three, then you can use the rest for the world.” Baigan raises “saving theory” to “love of mankind”. His final remark is “saving is loving mankind.” In this article, I discuss Baigan’s “saving theory” together with “offering” (Fuse)

1. 今なぜ、梅岩の儉約論なのか

近代社会の基本哲学は fides (信仰) からの ratio (理性) の解放にある。それは飽くことなき欲望ジンメルの言う “more and more” 「もっともっと」の原理のもと止めどもなく進みその速度を速めていることである。ratio の開放は人間本性 (human nature) の内部まで浸透し、貪欲な相(すがた) として表れる。人間の欲望は大別して性欲や権力欲、経済欲などに分かれるが、この中で何が強力かと言えば、「価値低きものほど強力である」との譬えの通り、経済欲 (economy) であろう。なぜならば、性欲 (sex) も名誉欲 (honour)、権力欲 (mighty) も経済欲の前に平伏す以外にはありえないからである。さらさら光る黄金の前に価値観が転倒し、老婆の下に若き僕を膝まつかせるのもさらさら光る黄金のなせる業である。堆く積まれた札束の前に理性的であれという方が至難の業であるからである。その典型が今回問題となった三笠フーズであろう。これまでも食品偽装が問題となり、呆れてものが言えなかったが、しかし今回の事故米の販売は農薬が使われ最悪の場合生命をも犠牲にせざるをえないということであるから、偽装や賞味期限の改竄とは性質が異なる。それも確信犯であり、すべて承知していたというのであるから驚きである。三笠フーズの社長は記者会見で「儲かるからやめられなかった」と言っているが、これでも経営者かと開いた口が

塞がらない。一連の食品問題もここまで来たかと、飽くことなき欲望解放の実態を垣間見る思いがしてならない。⁽¹⁾

井原西鶴ではないが「金銀が氏系図」となり、「金のないのは首なしや」に貶められてしまうからであろう。⁽²⁾こうして政治が優位を保っていた社会は経済が幅をきかす社会に移行し、経済主義が台頭し今日に至っている。経済主義の特色は本来の価値観が転倒し、経済にすべての価値が従属する関係が確立するという点である。⁽³⁾本来市場は客観的であるはずであるが、市場原理主義によって曇らされてしまうことがよくある。市場原理主義といわれる現象が席卷してしまうという事実である。地球有限時代が叫ばれてから久しいが、依然として経済主義は資源を湯水のように使い、枯渇化する資源そのものが競争を促進するという側面を合い兼ねているというのが現状である。石油（資源）を湯水のごとく使い、消費は美德であるとの考えの下、大量に使う方が経済的に正義であるから多いことはよいことになり、資源を大量に使う人ほど高く評価されるという事実である。金持ちの犬が牛乳をたらふく飲み牛肉をたらふく食べているという現状、さらに豊富の中の貧困を反映しメタボリック症候群の存在も「資源の適正配分」(just allocation) であると見なされてしまう。片や明日の食糧に事欠く億単位の人が存在するのにである。⁽⁴⁾

だが、今日こうした正義論は通用しなくなってきた。基本的に資源と人間の生存に係わるわけであるから、これ以上の資源の浪費は許されないとこに來ていると見るべきで、換言すれば、経済活動が生存条件を超えるようになってきていると見ていいからである。だが、これも部分の適正が全体を見誤らせている。京都議定書から北海道洞爺湖サミットに至る経緯がその事を端的に示している。全体つまり地球レベルでは人間と自然の調和関係が分かっているが、部分つまり個人レベルでは儉約の精神が吝嗇に転換してしまからである。西欧とアメリカ、日本さらにアジア、アフリカではかなりの温度差がある。アジア、アフリカ諸国に言わせれば、産業革命をいち早くやってのけた先進工業国は資源を湯水のように使っておきながら、しかもメタボリック症候群のように使い過ぎに病んでいるのが実情ではないか、と。過剰に資源を使用しているために心も体も病んでいるにもかかわらず、我々が少しでも先進国に近づけようとしているのに歩調を合わせろと言うのは先進国のエゴではないか、と。アメリカの立場に近い日本は低炭素社会への意向を示したが、具体的なプログラムが出来ているわけではない。旗印としては正しい方向であろうが、その唱道者である福田前首相が政権を放り出し（平成20年9月1日）てしまったのでは、低炭素社会が言葉だけに終わったと受け止められてもいたしかたあるまい。福田前首相の提唱した錦の御旗は、方向性としては正しい選択であったといえよう。ようやく日本も低炭素社会へ向けて動き出そうとしていた矢先だけに、世界から見れば洞爺湖サミットにおける日本の意気込みはいったい何であったのかということになりかねない。せめて部門別数値目標を提示し、一早く低炭素社会への取り組みをきちんと示し、その決意を内外に訴えるべきであろう。⁽⁵⁾政権の行方に関係なく議長国としての姿勢を示し儉約の正当性を説いていく必要がある。アメリカのように中国やインドを引き合いに出し、彼らが同調できなければ同意できないとする論調は先進国のリーダーとしての発言には相応しくない。アメ

リカは世界でもっとも多く資源を使っている。そのアメリカが、中国やインドと同じレベルで論じているところに儉約の真意をどこまで理解しているのか、甚だ疑問に感じざるをえない。アメリカの態度はどちらかといえば、吝嗇の部類に入る。日本も半ばその範疇の域を出ない。かろうじて西欧の方向性が儉約の部類にはいると見ていい。儉約と吝嗇では天と地ほどの差があるからである。梅岩は真の儉約を「三つ要るところの物を二つで済ませ残りの一つを世界のために使う、儉約は人とを愛することである」⁽⁶⁾と強調し、儉約を人類愛まで高めているのではないか。

梅岩は儉約を物の性を明らかにすることであると教えている。物の性を明らかにすることは物の持つ本質を明らかにすることである。物の持つ本質を明らかにすることは一体何を意味しているか。本論では、梅岩の儉約論の本質、さらにその延長線上にある布施の本質を明らかにすることによって、近代社会が物を飽くことなく消費しその上無駄遣いによって成り立ち、限界に直面し方向転換しなければならない時期に来ていることを念頭に、これまでの原理を方向転換しなければならない根拠を儉約論に見いだしていきたい。

2. 性を明らかにする

梅岩の主著『都鄙問答』（元文4年1739年）は大著ではない。どちらかといえば、教訓を列挙したような極薄い書物である。『論語』や『孟子』、さらには『書経』などと較べたら物の数ではない。四書五経で言えば『大学』に相当しよう。『大学』はすべて数えても2000字以内であるから、これらと較べたならば字数の上では比較にならないが、『大学』に相当すると考えれば先ず間違いはない。⁽⁷⁾日本でも荻生徂徠 三浦梅園 熊沢蕃山などと較べると物の数ではない。どちらかといえば、三浦梅園の『徂原』に近い書物である。⁽⁸⁾さらに横井小楠の体裁に似ている。梅岩と共に分かり易さを強調している問答形式の『国是三論』（万延元年1860年）、『沼山対話』（慶応3年1866年）、『沼山閑話』（慶応4年1867年）に似ているといってもよい。⁽⁹⁾「大著は大過なり」なる格言がある。梅岩の『都鄙問答』はその対と考えれば優れていると言うことにもなるが、根拠はない。『都鄙問答』は、4巻40段に分かれ、どの段も教訓が詰まっている。とくに短いのは商人を論ずる段でわずか600字余に過ぎず、⁽¹⁰⁾他の段もそう長くはない。ところが性を明らかにする段は突出している。「性理問答の段」である。⁽¹¹⁾『都鄙問答』は文字通り問答形式になっている。最初の頁は梅岩が世の人をいい加減な言説で惑わしている、いったい何を根拠としてそんないい加減な言説を広めているのか、という故郷からの客人に答えることから始まっている。これに梅岩は『大学』、四書を中心として答えている。内容の点については後述することにして、『都鄙問答』の体裁が分かれば梅岩が何を訴えたかったかが良く分かるのでこの点から明らかにしていこう。

『都鄙問答』は、商人、町人に対してより分かりやすく説いた書物である。それが証拠に梅岩は、学問の方法論として、「こころの磨種」を強調している。「こころの磨種」とは、心を明らかにするために、難しい言い回しは却って害になるから、そういう方法は採らないと言明している点である。

「譬えば此に一人の鏡磨者あらん。上手ならば鏡を磨に可遣。磨種に何を用ゆと可問や。儒仏の法を用るも如斯。我心を琢磨種なり。琢磨後に磨種に泥むことこそをかしけれ。假令儒家にて学ぶといふとも、学び得ざれば益なし。仏家を学ぶとも、我心を正しく得るならば善かるべし。心に二つの替りあらんや」。⁽¹²⁾梅岩が商人意識の高揚を掲げたのは、農本商末論にたいする商人の正当性を強調するためであった。その意気込みは、『都鄙問答』の出版に際してとった梅岩の態度によく表れている。そこが他の儒者と異なるところである。時代は下るが、佐久間象山のようなタイプの学者ではない。学問を専門とすることがなかった梅岩は、中身のことはそう問はない。「神仏儒悟る心は一つなり」といって憚らなかつた。おそらく神道や仏教、儒教どれ一つをとっても一代学派が形成されようが、梅岩にとってそういうことはどうでもよいことであつた。問題の神髓に迫ればそれでよいわけで、神髓に迫る前に議論しても無駄なことであると考えていたからに外ならない。それが証拠に梅岩は、有名な「文字芸者」という言葉を使って憚らない。「書物を読み、書の心を知らざれば、学問とは言わず。聖人の書は自ら心含め玉ふ。其心を知るを学問と云。然るに文字ばかりを知るは、一芸なる故に文字芸者と云」。⁽¹³⁾本質に迫る前に議論百出する学問に対して学者などの言説には与しない、と自信のほどを見せているのはそれがためである。この背景に荻生徂徠などの大学者が控えていることを考えれば、梅岩が何を言おうとしていたかおよそ察しがつこう。梅岩の胸には商人や町人が相手であるという本心があつた。だから難しい言い回しをしても分からないと考えていたからである。問答形式にしたのはそれがためである。何も銜学ぶる必要はなかつた。銜学が仇になると考えていたからに外ならない。

もう一つ『都鄙問答』について言っておこう。それは抵抗の書であつたと見ていい。抵抗の書という意味は『都鄙問答』の中身でさえ当時としては幕府の禁に触れる恐れがあつたからである。『都鄙問答』が出版される背景を考えて見ればよく分かる。赤穂の討ち入りの余韻がまだ覚めやらぬ時期であつたからである。40年も前のことであるが世論は地下水脈で大きな話題が続いていた。こうした時期に四民平等を訴えることは、幕府に水を差すことになりかねない。梅岩が恐れたのはここである。四民平等論を訴えられたのでは幕府の立場がない。商人の利は武士の禄と何ら変わらないと考えたからである。工人とて同じである。何故に商人のみが一番下に位置づけられる必要があるのか。職業において同じ船を漕いでいるわけであるから同じ禄を食んでよいというのが梅岩の考えである。しかしこの時期、赤穂が幕府に楯を突いたという元禄の事件は幕府に焼き付いている。綱吉が世直して生類憐れみの令を出し過酷な政治を布いたのも幕府秩序の再確認を図るためであつたことを考えれば、梅岩の四民平等論は、命をかける訴えであつた。それが証拠には『都鄙問答』ではいかなる弾圧があろうとも絶版にはしない旨が強調されている。その決意のほどが伺われる。そう言う意味で『都鄙問答』は dissent の書物と見なしていいであろう。⁽¹⁴⁾

これで『都鄙問答』の性格が明らかになった。先ず庶民階級への啓蒙の書であつたということである。しかし庶民階級の啓蒙の書とはいえ『都鄙問答』は難解である。なぜ難解にしたのか。一つには体裁上のことがあつたと言われている。難しいという表現をしたが当時としてはそうでもなか

ったのであろう。当時外国語（漢文）で論文が書かれている事を考えれば『都鄙問答』はそう難しいことではなかったと言えるであろう。荻生徂徠と較べたらはるかに易しい表現であると言えなくもない。それに較べれば難解とは言えないであろうが、庶民、商人を相手とするという点では梅岩は言っていることと違うではないかという疑問はどうしても残る。なぜそうしたのか。『易経』を借りてきて冒頭を飾ったがペダンティックに見せるためであったことは否めない。⁽¹⁵⁾しかしそれにしても当時としては当たり前のことであるから、学問を商売にしている立場から見れば容易な部類にはいると言えなくもない。しかしなぜ文字章句に拘ったかという疑問はどうしてもこのこる。

梅岩の儉約論の範囲は四書、五経、神道、仏教の手短な言説の範囲をでるものではないから一般には難解の部類からは遠い存在と見ていいであろう。梅岩の儉約論はそう難しいものではない。ごく当たり前の身近なものばかりである。儉約論の背後に勤勞が控えていることは論を待たない。勤勉の哲学である。勤勉は天道の中に組み込まれ人道の下に生業として一所懸命働く以外ではあり得ないことを教えている。そこには労働に誤魔化しはきかず、「二重の利」を採るようなことは論外である。⁽¹⁶⁾「二升を遣」も御法度である。⁽¹⁷⁾なぜならば、天道の中に枠組みされているからである。通俗的に言えば、すべてお天道様はお見通しであるということである。誰も知らないからいい加減な商売をしても構わないということは通用しない。「天知る、地知る、人知る、吾知る」でいずれ知れてしまう。天道と人道の一体の中に労働の真のあり方があると考える梅岩にあって、天道は誤魔化せない。天の命によって労働が神聖なものとして実践される。ここに人の道が体現される。労働は天道人道の統一の中にあり、これを一步外れてはならないと見なされていたからである。そういう意味で『中庸』の性、道、教論と一にする。⁽¹⁸⁾当時、儒者といわれる人たちとそう違うものではない。だが梅岩はここから先が違う。勤勉を正直と結びつける。勤勉は正直が本になっているというのである。とくに商人は正直でなければ商売はなり立たず、商人と屏風は直ぐでなければ立たないと強調して止まない。⁽¹⁹⁾それゆえ梅岩にあって口利きや賄賂などは言語道断である。倒れ者からの礼銀を受け取ることなどは論外である。⁽²⁰⁾口利きや賄賂が横行している今日梅岩のこの箇所は特筆大書していいであろう。⁽²¹⁾大分県教員採用に絡む口利きは梅岩に言わせれば呆れて物が言えないということになる。⁽²²⁾さらに ODA に絡む見返りとして政府高官に賄賂を送って見返りを求めるケースが話題になったが、これも同じである。⁽²³⁾

これで性を明らかにする前提が整った。性とは「本然の性」と言い換えることができる。「本然の性」とはなにか。端的に言えば、仁義礼智信の五常を指す。仁義礼智信は人間が持って生まれた本質であり、誰にでも備わっている。天から与えられたもので、身分職業を超えて平等に与えられている。朱子学はそう説明している。梅岩もこの説を踏襲していると考えていい。『中庸』に天命これ性という。性に従うこれ道とい、道に従う、これ教えという件を見ても分かるとおおり、『孟子』の性善との玉ふは、心尽くして性を知り、性を知る時は天を知る、天を知る学問の初めとす」ということは明白である。それゆえ、「性を知る時は、五常五倫の道は其中に備わり」、「天を知れば事理自明白なり」なのである。⁽²⁴⁾善の本質と考えていい。梅岩はいろいろなケースを取り上げ性を説

明していったが、端的に言って五常が性と考えていいであろう。それ以外に人間の本質があらうか。性善説、性悪説双方含む例を雑記しているが突き詰めて言えば性は生なり、天から下された性と考えてよい。人間の中に性が内在するがそれは五常以外ではない。五常を失っては人間存在そのものが否定されることになるからである。そうは言っても誰でも仁の人、義の人、礼の人に、智の人、信の人になれるかというところではない。仁義礼智信が曇ってしまうため本来備わっている性を発揮することが出来ないでいる。なぜか。「気質の性」によって曇ってしまうために仁の極致、義の極致、礼の極致、智の極致、信の極致へ到達することが出来ないでいる。つまり限りのない欲望に負けてしまうため「本然の性」が曇らされてしまうとみなされている。身近な例を取ればここに欲望は衣食住、中庸の徳で止まって欲しい、と。食一つをとってみても暴飲暴食は欲望を逸脱している。欲望そのものを否定しているわけではない。度を過ぎた欲望を戒めているわけである。その外の欲望も同じである。「本然の性」を明らかにし限りなく聖人に近い極致を目指すことが重要である。

欲望の実態を考えてみよう。近代という時代は限りなく欲望を充足するための歴史であった。天意から解放された人欲は限りなくその欲望を追求してやまない。「気質の性」のなかでも経済的欲望が強い。他の欲望も経済的なそれに従う。なぜならば「地獄の沙汰も金次第」、「金銀が氏系図」になっているからである。すべての権威から解放された近代は、限りなく欲望を充足することが善であると考えられ、他の歯止めはきかない。バベルの塔はますます高くなる一方である。「俺の目の黒いうちは儲けさせて頂きます」という次元はまだ序の口である。極端に言えば、生命すらもカネのために犠牲となっているではないか。「死んでお詫びを致します」、これが経済主義の極致である。

経済主義をさらに見てみると無駄遣いが善であるような風潮が罷り通っていると言うことである。消費は中庸の徳であるはずであるが、儉約からはほど遠い存在になっているではないか。ゴミ収集所に向いて見れば一目瞭然である。まだ使える物が所狭しと捨てられているではないか。家庭ばかりではない。産業廃棄物が何億トンにも達している現実がこの事を端的に物語っている。こうして消費財も資本財もおしなべて使い捨て経済の名の下に巻き込まれ、企業も家庭もまだ使える物が早すぎる陳腐化にどっぷり浸かっている。これでは物の持つ性をいかに発揮するというわけにはいかない。人間の性が仁義礼智信であるとするれば、物の性は人間に役立つというところに性の本来の相がある筈である。これでは本来の目的を達成出来ずにいるというのが実情ではないか。性は物に宿って生命を与えられ役立つという風に姿を変える。だから梅岩は物の法に従うと強調する。物の法に従うとは物の持っている本質つまり性をいかに発揮させることである。よく例に出される捨て縄を考えてみよう。これを捨ててしまえばそれまでであるが、よく乾かし飯炊きに使えばまだ役立つし、さらに残った灰は畑の酸性土壌をアルカリ性に変えるため大いに役立つ。これが物の法に従うという意味である。従って使い捨て経済は物の法を無視していることが分かって。さらに言えば、物の法を無視することは、人間を軽視していることになるからである。儉約の奥地にある勤労は人間の本質である。人間とは何かと問えば労働することにその本質があるからである。

使い捨て経済がいかに人間を軽視しているかは捨てられた物が人間の労働によって造られない物はないという点を考えただけでも頷ける。それゆえ使い捨て経済がいかに人間を軽視しているかがよく分かる。極端に言えば、物を捨てる事によって人間を捨てているのと同じ結果になっていることを想起すべきである。

現在では人間そのものが単用消費財的な存在になっている。本来ならば重要な資本財的存在として位置づけられるべき性質のものであろうが、派遣社員に組み込まれた日雇い労働者は、単なる消費財的に貶められていると言っていいのかもしれない。これでは本来の生産の循環が出来なくなってしまう。これほど人間を軽視している社会が外にあるだろうか。つまり経済主義は究極的な姿として人間を単用消費財的に位置づけているがこれでは長期的に見て再生産の図式にはのらない。梅岩の儉約論はこれとは反対に労働の対としての儉約論によって人間を大事にしていることを想起すべきである。儉約論を通して人類愛を説く梅岩は単用消費財的に酷使されている労働をどう見るか。梅岩の儉約論の真意が甦ってくる理由がここにある。

性を明らかにするという意味は、実は儉約が何よりもまず人間をベースにしなければならない点を読み取る必要があるということなのである。梅岩の儉約論が人類愛に則っているという真意は以上で明らかであろう。

3. 布施の真意

儉約の対に布施がある。これまで梅岩の布施論は節約した物を単に譲るというふうに解釈してきたむきがあるが、これでは不十分である。なぜならば、地球有限時代になって単なる布施論では今日の課題に答えることが出来ないからである。というのは、これでは梅岩の真意を十分に活かしているとは言えないからである。単なる儉約論の結果であれば消極的にすぎない。地球有限時代には積極的な布施論が必要である。消極的な布施論がなぜ低炭素社会への移行のために不十分であるかということを考えてみなくてはならないからである。本源財が食いつぶされ再生不可能であるとするれば、積極的に布施が行われ循環過程にのるように行われる必要があるからである。単なる不足を補うために布施を行うというのでは再生産過程にのることは出来ない。梅岩の儉約論は再生産の循環過程にのるような布施論も含んでいると見るべきであろう。「よく貯えよく施す」という意味はまさにこの事を含んでいると見ねばなるまい。三つ要るところの物を二つに済ませ残りの一つを困ったところに譲る。厳しい労働によってあるいは厳しく儉約することによってその余力を他のために使うことの意味をよく考えてみよう。布施の現代的な意義は二つの側面があることを理解しなければならない。自らに厳しく律し激しい勤勞によって得た果実を貯えるという意味は貯えた物を自由勝手に使うというのは近代社会の所有権の解釈である。ここに倫理や道徳が入り込む余地はない。いや倫理や道徳を排除してきたのが近代の歴史である。自由な経済活動に神や権威は邪魔だというのが近代社会の所有意識である。自由勝手にさせてくれというのが近代社会の合い言葉になった。

困った人がいても怠惰な故致し方ない。市場が評価しないから自由経済、自由社会の帰結であるから自己責任の結果である。勤労の結果果実をどう使おうと自由勝手である。第三者が口を挟む必要は大きなお世話となる。その結果どうなっているか。競争に敗れた者は悲惨この上ない。格差社会を通り越している。生存さえ危ぶまれているではないか。ある場合には自ら命を絶つ社会に陥り全体が逼塞状況になってしまう。これをどう考えたらいいのか。国家レベルで考えても競争に敗れ資源を持たない国は悲惨な状況におかれている。マネーゲームに翻弄されて喘いでいる国もある。それでも資源の適正配分として近代所有権の正当性は保証されますますます深刻な状況に陥っている。

こうしたとき、儉約が人類愛まで高められている視点をどう考えたらいいか。地球有限時代に再度認識されねばならないということである。人類愛まで高められた儉約論は積極的な布施論によって、人類愛を具体的に推し進める役割を果たしているという現実を認識する必要があるということ、つまり梅岩の布施論は現代社会の論理を超えている点に今日的意義があるということである。布施は確かに倫理や道德の問題に入る。倫理や道德の問題は人に強制されるものではない。倫理や道德は自然におきあがる忠恕の精神によってもたらされる。孔孟の心を知れば性を知るという梅岩の心学の精神がここにある。儉約論から積極的な布施論によって地球有限時代の再生論が甦り、再生産軌道にのるための積極的な布施が必要であるという意味もここにある。それには単純な経済主義をのり越えなければならない。経済主義をのり越えるということは近代の原理をのり越えなければならないという風に理解しなければなるまい。近代の所有意識もまたその例外ではない。こうして今日近代の「もっともっと」の下にやってきた飽く事なきバベルの塔の高さへの挑戦は反転せざるをえないし、また反転させなければならない。この時梅岩の人類愛に基づく儉約論や積極的な布施論が一筋の光明をもたらしてくれる。単純なことであるが心学の原点は性を明らかにし、経済主義を超えた布施の世界を実践する以外にはあり得ない。「富者の任務は推譲にあり」に移行し積極的に社会の平均化に向かう必要があろう。具体的、積極的の布施論を展開しておこう

梅岩は「よく貯えよく施せ」⁽²⁵⁾と強調する。「富者の任務は推譲にあり」と説く尊徳と共通する。儉約の対に布施がある。儉約を説く梅岩が布施を説くのは矛盾しているのではないということも一理あろう。それでは布施の真意は理解できない。これまで布施は単に貯えた余力を他に押し譲るという風に理解してきたきらいがあるが、地球有限時代の今日梅岩の布施はもっと積極的な意味を持ってきていることを想起すべきであろう。布施は税金とは違う。余力を持った者が隠徳善事的に行うのが布施であるから、性に通じていなければとてもできるものではない。余力を持った者が恵んでやるというような短絡的なものでもない。本心から出ていることを想起すべきである。本心とはなにか。心学は書物を堆く積むことは避ける。無心に心を究ることであるから書物は頼りにならない。心を得るための手段であると説く。従っていくら手段が優れていても目的に到達しなければ意味がない。例えば心を得る手段が書物であるとすれば読んだ後はすでに不要になってくる。それどころか書物に頼っていると本心が見えなくなるという。二階へ上がったならばもうは書物は不要になる。二階から書物をぶら下げても危ないではないか。つまり、文字芸者では困るというのである。⁽²⁶⁾

だから、梅岩は世の儒者には与さないともいう。

商人は日々の生業に忙しいからとか本心を失いがちである。だから本心を取り戻すためには心に積もり積もった塵や垢を取り除かなければならない。心にいろいろ積み上げるのではなく本心を取り戻すために心を洗濯する必要があると説く。一つ一つ心を剥ぐことによって本心が近づいてくる。もうこれ以上剥ぐことが出来ない心が見えるはずである。その心の本心でありあるがままの心つまり「ありべかかりの心」であると梅岩は言う。「有りべかかりに言うことは善者なり。我より人の実不実をみる如く、他よりも又、我実不実を見ることを知らず。伝曰、人視_レ己如_レ見_レ其肺肝_一と。此理を知れば辞を飾ずありべかかりに云うゆえに、正直者なりと、何事も任せ頼るゆえに、世話なしに人一倍も売るものなり」。⁽²⁷⁾この方法は心に積み上げ知識を豊富にすることが本来の相であるという従来の学問とは正反対である。本心は真心であり、赤心である。真心は本心そのものである。だから石門心学は「どうぞご本心にお従いなされ」と説く。「我も立ち先も立つ」ことが求められる。

とすると布施がたんなる恵みや富者の慈善とは別問題であることが分かっていく。布施は本心の結果なのである。これは現代社会が見落としている基本哲学である。洞爺湖後の地球環境問題は布施にあると言えるという意味はまさに本心への復帰が重要であることを教えている。京都議定書、洞爺湖サミット後の地球環境の枠組みは布施とは反対に向かっているとしか見えない。お互いに貯えることに腐心し、譲ることを知らない。自国の利益ばかりが先行し押し譲れば富み栄えるの警えを忘れられている。自国では資源石油を湯水の如く使い、他国に我慢を強要しているというのが現実である。節約はあなたのところでやりなさい。先進国ほどそうした意識が強いのも困った問題である。とくにアメリカは石油30パーセントも使っているのに、後発国に節約を強要している姿は何ともやりきれない。自国では石油、食糧などたらふく消費し豊かさの中の貧困が問題になっているにもかかわらず、後発国が協力しなければ会を脱退するというのでは布施をどこまで理解しているかまことに心許ない。自国のことしか考えてはいない。これでは梅岩に言わせれば吝嗇の部類に入らないか。梅岩は自分のためにだけ使おうとするのは欲心つまり吝嗇の部類にはいると言っているが、そうであるとすればアメリカの態度は吝嗇ということになる。本心から逸脱している結果であろう。梅岩は本心から逸脱している状態を放心と表現した。放心とは心がない状態で在るから、物事の本質が見えない状態を言う。心ここに在らざれば視れども見えずである。「天地の物を生ずるを以て心とす。其生る所の物各天地物を生ずる心を得て心となす。然れども人欲に掩れて此心を失す。故に心尽くして、天地の心に還る所にていふ時は、放心を求ると説き、又求めうれば天地の心となる」。⁽²⁸⁾布施が放心状態からは出てこないことが分かっていく。それゆえ布施がいかに人類愛から出ているかを読み取る必要がある。

梅岩はある親方の例を出し布施の正当性を説明している。親方は我々の生活には厳しく儉約、儉約で一銭も弾じこうとしないが、しかし村のためには大枚を寄付する。これはもったいないことであって、そんな大枚をはたくより我々職人に分け与えた方がよほどためになるのではないかと親方

に詰め寄る場面があるが、これに対して梅岩は、今の親方はよほど出来ている人であると褒めちぎっている。その親方はよく物事の本質をわきまえている、と。梅岩は職人の浅墓さを戒め親方は立派であると論じてる。⁽²⁹⁾今日的に言えばそんな余力があるのであれば一時金として支給せよと言うことになろうか。布施の大切さを分かっている企業人は現代では少ない。税金をごまかしたり売り上げを過少に申告し税金逃れをしようとたくらんでいる企業人が枚挙に暇ない現実がこの事を端的に示している。これでは布施による世の発展は認められない。なぜ梅岩は布施を強調するのか。それは自然が天命の下に繁茂もするように、人間界も天命による布施によって繁榮すると信じているからに他ならない。⁽³⁰⁾

布施はなにも金銭的な支出ばかりではない。青年海外協力隊による実践なども布施と考えてよいであろう。経済的に未発達な国に日本の技術を根付かせ所得向上に繋げていく事業なども布施の典型と考えていい。たとえば、日本では養蚕業は風前の灯火補助金で辛うじてやっているというのが現状である。その補助金もほんの僅か養蚕業が生き延びているに過ぎない。国際化、産業構造の波に吞まれ今では産業遺産の部類に入る。博物館で蚕を飼っているというのが偽らざる事実である。だがこれも見方を変えれば、発展途上国では養蚕業などが可能であるという事にもなる。かつて日本が養蚕で近代工業国の仲間入りしたように、日本では遺産であろうが例えばアジア諸国のラオスなどでは養蚕、製糸業の可能性はある。労働コストが安いために製品化の余地はあろう。この養蚕、製糸業の技術を移転し所得向上に繋げることを手伝うのも立派な布施と考えてよいであろう。儉約を説くことが消極的な経済論であるとすれば、布施は積極的は経済論に繋がる余地がある。単にマネーゲームによって発展途上国に多大な負の遺産を残す風潮が経済主義として承認されるような雰囲気であるが、これは布施の反対を言っているのであって地球レベルではマイナスに働き布施の真意が活かされないことになる。一国をおもちゃのように弄ぶマネーゲームは布施の敵であろう。さらにODAの美名に隠れて賄賂攻勢によって逆に資金を巻き上げようとするようなやり方は布施の精神からは大きく逸脱しているばかりではなく、梅岩に言わせれば口利き、倒れ者からの礼銀などはもっとも卑しめられる行為であって言語道断と言わねばならない。こうしたことではなく、日本においては遺産になっている産業でも、発展途上国にあっては先進的な産業になろうから積極的に援助し豊かな社会への道筋をつけてやる必要がある。これは儉約論でもある。儉約の新しい解釈として十分通用するであろう。儉約、布施は梅岩のいうように人類愛から発せられていることを想起すべきである。⁽³¹⁾

4. 梅岩と尊徳

儉約が消極的な社会貢献であるとすれば、布施は積極的なそれと考えていい。それゆえ梅岩の儉約論は布施と表裏一体になることによって、成果を上げることが出来よう。これまで儉約と布施は別々に論じられてきたように思う。儉約と布施を表裏一体と考えることによって梅岩の儉約論は生

きてくる。この関係をより分かりするために尊徳の儉約、推譲を取り上げてみよう。梅岩の儉約、布施論も尊徳の儉約、推譲論も結論は同じである。片や商業他方では農業の世界で展開しているが、言っていることに変わらない。これまで私は尊徳の儉約、推譲論に重きを置いてきたが、梅岩の儉約、布施論も同じ視点に立っていると考えるようになったのはごく最近である。⁽³¹⁾商業世界への理解不足があったところに梅岩への認識が浅かったと反省している。この点については他日を期すこととして、尊徳の儉約、推譲論を見ることによって梅岩の儉約、布施論の正当性を実証しておくことにする。

尊徳についてはいろいろのところで展開しておいたので、ここでは「報徳全種金」に布施を重ねて展開しておこう。「報徳善種金」は報徳の精神によって限りなく資金が拡大していく。尊徳に固有な思想である。近代社会からは考えられない道德の世界に足を踏み入れるもので、その根底に元恕金なる考えがある。「元恕金」とは元を思いやる資本のことで、この「元恕金」によって資金が拡大され、再生産軌道に乗ることになる。事業を始めるのに資金がなく生産出来ないでいる人がいるとしよう。少しずつ資金を出し合ってファンドを造り、事業をしようとしている人に貸与し、生産が軌道に乗って成功すれば借りた資金を返済することになるが、仮に5万円借りたとしよう。1年に1万円づつ返済し5年で資金は返済し終わる。だが5万円借りて5万円返済したのではファンドは拡大しない。困った人に貸し与えるためにはファンドの拡大が必要である。5年間5万円返済した後、お世話になったということですらに1年余分に返済する返済金のことを「元恕金」と呼んでいる。こうして「報徳全種金」は「元恕金」によって拡大し、資金不足の人を生産軌道に乗せることができる。「報徳全種金」は徳に報いるという意味で経済の埒外にある。「元恕金」には法的根拠はない。徳が根底に据えられている。財が始めにあるのではなく徳が本になっている。ここでは近代社会の金利という発想はない。あくまでも徳が中心になっている。だがここで問題になることがある。もし「元恕金」を余分に支払わなかったらどうなるかということである。この時期それぞれ共同体に属し、共同体のきまりの中で共同生活をおくっている。共同体の風習や慣行が優先する。そうでないと共同体の中では生きられない。共同体の風習の上に成り立っていることを考えれば、「元恕金」1年分返済しないで済ませることは出来ないからである。もし共同体の風習を無視したならば、村人から相手にされなくなる。むしろの方が厄介であろう。それゆえ、「元恕金」の余分の返済を無視することは出来なかつたと見なしてい。 「元恕金」がファンドの拡大に繋がっていく。ここに梅岩の布施論が甦ってくる根拠がある。それゆえ布施論は消極的な儉約論から一歩踏み出していることを読み取ることができよう。

布施も推譲も基本的に変わるものではない。ただ近代社会と決定的に違うところは、「元恕金」は御陰様という意を込めて一年返済を余分に行いそれによって資金が拡大し再生産が拡大し活性化していく。布施の場合も積極的に考えればそれによって生産軌道に乗るようにしていけば「元恕金」に類似していることを忘れてはならない。今日では法によって決められているが、梅岩や尊徳の時代は倫理や道德によって自主的なものであった点に注意する必要がある。今日実行しなければな

らないのは地球レベルでの儉約、布施論である。自国さえよければという発想は通用しなくなっている。現代社会は倫理や道徳を経済の背後に強力に持つ必要がある。梅岩の儉約、布施論はその事を我々によく伝えている。

5. 儉約論の現代的意義

儉約論が布施論と一体になることによって地球有限時代の救世主になる可能性について見てきたが、最後に、儉約、布施論の究極的な相として、梅岩の儉約、布施論は現代社会の論理を超える性の経済学の可能性をもっていることを論証しておこう。近代社会は生きた自然からの解放のもと生命のない世界を経済の対象としてきた。とくに産業革命以降はそうである。工業的世界では生命に関係なく生産が開始され石油をはじめ資源は無限であるとの下に展開されてきた。近代経済学は生きた自然から解放、欲望や効用をキーワードに据てやってきた。柴田敬博士の言う本源財は無限ではなかったことがようやく白日のもとに晒されるようになった。とくに我が国では資源と食糧に端的に表れ、慌てふためいているという状況にある。マネーゲームの煽りを受けガソリンが高騰したり、食糧事情が心細くなってきている。おそらくこの程度のことはまだ序の口かもしれない。かつてローマクラブの『成長の限界』(Limmit to growth)が衝撃をもたらしたことはまだ記憶に新たなところであるが、そのときの方が衝撃は大きかったと言えなくもない。なぜならば実態が分かっていなかったからである。第一次オイルショック時は原油が2ドル台から10ドルに上がるというものであった。背後に石油をはじめとする諸資源が30年先には枯渇するという風評がまことしやかに喧伝されたからである。その時の衝撃と較べれば現在の危機感はまだ深刻の度合いにおいて切羽詰まっているとは思えない。しかし現実は今と較べて深刻の規模、深さは現在の方がはるかに深刻であることに間違いはない。にもかかわらず、価格が上がれば自動車が走れない海外旅行も燃料高騰でいけなくなる程度にしか理解されていないというのが現状であるから、危機感は今の方がはるかに大きかった。

そこで地球有限時代に枯渇する化石エネルギーから解放される道を早急に模索することが急務になっている。福田前総理の提唱した低炭素革命もその一つに違いない。積極的に技術革新によって新エネルギーを模索する方法も一つの選択手かもしれない。だがそれには時間もかかるし、確約される保証はない。それゆえ今一番先に実行できるのは儉約である。これまでの儉約は消極的なそれであったがこれからは積極的な布施と対になる儉約が不可欠であるということである。布施と対になる儉約とは、倫理や道徳の世界に足を踏み込むとすることを意味し、近代社会の原理に別れを告げることである。現代社会の原理は飽く事なき欲望からの開放、「もっともっと」ではなく、小欲知足の世界に足を踏み入れることである。知足安分、足る知るである。もう一つは生の経済を呼び戻すことである。生の経済は、性の経済とも言える。「本然の性」に復ることである。仁義礼智信の「本然の性」に復り、性の経済を地球レベルで実践することであるといえよう。梅岩に言わせ

れば心学ということになろう。欲望充足無限の時代には地球資源も無限であるとの前提に立っていたから性の経済を考える必要もなかった。しかし今日その前提が崩れたわけであるから、つまり生きた自然からの解放が叶わぬことになったわけであるから大きく方向を転回しなければならない。ここに「生の経済学」が提唱される理由があるか。「生の経済学」は「性の経済学」でもある。元来経済学は「生の経済学」であったはずである。「生は性なり」、「性は生なり」が本来のあり方ではなかったか。

そこで本論で言う「生の経済学」についてを整理しておこう。人間と自然は相互に依存し循環過程の中に本来の相を顕現しているはずである。それが証拠には、人間の目は自然の芽に、鼻は花に、身は実に通じているではないか。自然は春芽をだし、夏花を咲かせ、秋に実り、冬種を蔵し、また春芽を出し、この繰り返すである。循環過程の中に天の道がある。人間も同じではないか。大きな目で見れば、植物の冬の過ごし方は人間世界にあっては黄泉の国とすることになるが、いずれまた黄泉の国から甦って循環軌道にのる。こうして人間も自然も大地に生をうけ大地に復って行く。人間はけっして生きた自然からの解放などあり得ない。自然に強く組み込まれて生を育む以外には道はないのである。それを生きた自然から解放できると考えたのは人間の思い上がり（hybris）ではなかったか。自然を従えようなどということは妄想以外ではありえなかったのではなかろうか。これまで人間は自然の側にたって一度でもいいから考えたことがあったろうか。本源財として収奪の対象でしかなかったのではないか。欲望の対象以外ではなかったのではないか。今日では自然資源が政争の具に貶められているのではないか。資源背景に国力を誇示し国を従えようとしている実態は何を物語るか。自然にしてみればいい迷惑なのではなかろうか。人間も自然の一部であるという認識に立てば、資源を武器として他国を従えようなどという発想は取れないはずである。human nature を見れば一目瞭然ではないか。もともと human nature は humus が soil、ground に語源をもっていることを考えれば、大地へ復って行くのが本来の相ではないか。儉約がいかに人間を大事にし、資源の無駄使いがいかに人間を軽視しているかもよく分かる。それゆえ勤労はたんなるエネルギーの放出として考えるべきでないであろう。勤労は天道を背景に誠の営みである人の道を実践していることを知る。

生、性を育むことに勤労の意味があるということである。近代経済学に代表される単に効用や欲望を満足させるための科学であるというような考えは非常に特殊なケースとしてしか存在していないかがよく分かる。これまでの経済に対する認識は根本から改める必要があるだろう。それを取り扱う経済学として同じである。lifonomy、lifonomics（生学、性学）と置き換えた方が理に適っている。さらに言えば、経済学は lifeeconomy、lifeconomics なる用語を使用する方が真の相を表していると言えよう。これからは、梅岩とともに polical economy、economics に換え lifeeconomy、lifeconomics に改める必要があるだろう。地球有限時代にはこの方が相応しい。⁽³²⁾

梅岩は自然の道によってつまり天の命によって四時大いにが繁茂するように、人間世界もまた天の命によって同じように繁栄する道を示した。人の道は生に導かれて性を育み、神聖な勤労によ

て真の富を生み出す。人の道の実践として真の商人の生業のうちに人間社会の繁栄する相を見て取っていた。人間と自然は一体である。自然を離れて人間存在などあり得ないし、人間が自然の一部である事を考えれば、自然を人間の側から自由勝手に支配するなどという発想はとれなくなるはずである。これまで人間は自己の欲望のために自然を限りなく食いつぶし、自然が無尽蔵に存在すると見なしてきた。あまつさえ、自然を政争の具にしているというのが実情ではないか。ここに生は性なりの本来の相はない。性は生なりの意味もない。

それゆえ、これからは人間と自然は表裏一体であることを自覚し、生は性なり、性は生なりの基本哲学に復る必要がある。いわゆる復初の思想である。天道の中に真の生業を見て取る理由がここにある。だから勤勉とは天の道を背景とする誠の営み以外ではあり得ず、誠の営みの結果としての儉約は真の富として社会に還元され、布施が本来の意味を持ってくる理由もここにある。梅岩の儉約がいかに人間を根源的に捉えているかがよく分かる。梅岩の儉約を布施との関係で追求してきた結果、人間と自然との関係、人間の自然への働きかけなど原点に復って考えてみる必要性を強く感じないわけにはいかなかった。梅岩の現代的意義も実はここにあると言わねばならない。

(やまざき ますきち・本学名誉教授)

注

- (1) 本論項を書いているさなか今回の事故米の報道がなされた。呆れて物が言えないのはもちろんのこと、次第に分かってきたことは、日本経済が抱えている構造的な問題に大きな要因があるということである。米輸入ミニマムアクセスに端を発しているわけであるが、減反政策まで遡ることが出来よう。しかし三笠フーズが諸悪の根元に決まっているが、農水省、太田農水大臣の発言には呆れんばかりである。犠牲になったのはなんの罪もない善良な市民、子供、老人、菓子製造会社、酒造会社などであろうが、これは梅岩の二升を遣どころの話ではない。
- (2) 井原西鶴『日本永代蔵』参照。
- (3) W. Sombart, "Deucher Sozialismus, 1937"
難波田春夫『ドイツ社会主義』1936年、前野書店。参照。
- (4) 柴田敬『転換期の経済学』日本経済評論社、1987年。参照。
この中で柴田博士は、「今日の経済文明が資源食いつぶしの文明であると気づいた」(43頁) 1951年(昭和26年)と述べ、以来資源食いつぶしの経済論を展開、例えば本源財(可壊的地力)などの考えを提唱し警鐘を鳴らし続けた。炯眼という外はない。
- (5) 福田総理の突然の辞任は、ただでさえ日本経済に悪影響をもたらしているという海外の批判が強いところそれに拍車をかける格好になった。低炭素革命は方向性として正しい選択であった。それを内外に力強く訴え日本の信頼を回復する絶好の機会であっただけに残念でならない。
- (6) 『石田先生語録 巻1』『石田梅岩全集 上』243頁。清文堂出版。昭和38年。
- (7) 宇野哲人全訳『大学』講談社学術文庫、1983年。参照。
正しくは『大学』は1753字、字種394にすぎない。
- (8) 三浦梅園には大著三語つまり、『玄語』、『贅語』、『敢語』があるが、『価原』は貨幣数量説の奔りとして高く評価されているが、これは『大学』とはいかないまでも、ごく薄いものである。
- (9) 横井小楠の著書にも大著はない。そう言う意味で、『都鄙問答』に近いかも知れない。問答形式になっているところもよく似ている。代表例が、『国是三論』、『沼山対話』、『沼山閑話』などである。
- (10) 『石田梅岩全集 上』『都鄙問答』巻の1、「商人の道を問うの段」32-34頁。清文堂。
- (11) 『石田梅岩全集 上』『都鄙問答』巻の3「性理問答の段」96-135頁。『都鄙問答』は4巻16段に分かれている。一段平均10頁余であるから「性理問答の段」がいかに突出しているかが分かる。しかも「性理問答」は単独扱いであるから梅岩がいかに力を注いでいたかが分かる

- (12) 前掲書、121頁。
- (13) 前掲書、137頁。
- (14) 梅岩は商人の身分を超えようとはしなかった。その意味では、保守的であった。だが、誇りうる商人意識として、農本商末に対しては抵抗せずにはいらなかった。『都鄙問答』は当時の風潮にたいする抵抗の書であった。士農工商、序列はなく商人の利を武士の緑と同等に見なしていた。商人の利と武士の緑は同等であった。商人意識は、意気、粋の域を求めるものであったと言ってよい。
- 性理の提唱は、まさにその現れであった。人間の性は努力することによって実現する。性善であり実現可能であった。「性理問答の段」に曰く「性善を知るは、至極のことにて有るべけれど我等ごときは何ほど聞きても得らるべきにあらず」（前掲書、『都鄙問答』、80頁）。梅岩は意義申しだてを商業の世界でやってのけたと考えていい。
- (15) どう見ても冒頭の『易経』からの引用は不自然を免れない。梅岩のどこかに大学者荻生徂徠などにたいするいいしれぬコンプレックスがあったのかもしれない。「大哉乾元万物資始。乃統_レ天。雲行雨施。品物流_レ形。乾道變化各正_レ性命_也」（『易経』）。前掲書、『石田梅岩全集』上、「都鄙問答の段」3頁。
- (16) 前掲書、84頁。
- (17) 前掲書、84頁。
- (18) 宇野哲人全訳『中庸』、48頁。講談社学術文庫。1983年。
- (19) 前掲書、『石田梅岩全集 上』、「性理問答の段」80頁。
- (20) 前掲書、「学者の行状心得難を問の段」86頁。
- (21) 前掲書、「或学者商人の学問を譏るの段」85-87頁。
- (22) 大分県の県教育委員会の賄賂問題には呆れるが、賄賂で有罪となった元校長は生徒の進級祝いの言葉として「心」を認めていたと言うからお笑いぐさである。元校長が『都鄙問答』を繙く機会があったならばこのようなことは避けられたのかもしれない。残念という外はない。
- (23) ODA に絡む賄賂性が問題となることが多いが、開発途上国の弱みにつけ込んで賄賂をとるなどということとはもっての外である。梅岩の布施論の真意を噛みしめて欲しいものである。
- (24) 前掲書、『都鄙問答』、「都鄙問答の段」、「性理問答の段」、5頁、107頁。参照。
- (25) 前掲書、『都鄙問答』、「或人主人行状の是非を問の段」、157頁。
- (26) 前掲書、『都鄙問答』、「学者の行状得難きを問の段」、137頁。
- (27) 前掲書、『都鄙問答』、「或学者商人の学問を譏るの段」、80頁。
- (28) 前掲書、『都鄙問答』、「性理問答の段」、125頁。
- (29) 前掲書、『都鄙問答』、「或人親へ仕の事を問の段」、59-68頁。
- (30) 前掲書、『都鄙問答』、「性理問答の段」、100-105頁。
- (31) 現代の布施の例を挙げておこう。群馬県甘楽町の出身で長岡建設という企業がある。社長の長岡今朝吉氏は典型的な布施を実行し、隠匿善事を絵に描いたような人物である。その実態を紹介しておこう。ふるさと甘楽町造石に住民が寄り合う住民センター、住民が憩いを求める造石公園、より広く造石ばかりでなく甘楽町住民が憩うスポーツ施設を備えた浅間公園、造石地区の精神的よりどころになっている地藏尊の修理費用、さらには白倉地区への天狗の面を備えた小公園、収集した名画の甘楽町への寄付、おそらく数十億円に上ると見られる布施を実行している。出発点は甘楽町の小中学校へのニュースを張り出す掲示板の寄付であった。もう何十年も続いている。布施の心が梅岩の心に通じている。梅岩もお陰様を説く。今日商売を続けているのは皆さんのお陰である。したがってそのお陰に報いることが布施である。石門心学は布施を強調する。今日商売を続けさせていただいているのは皆さんの御陰であると。今朝吉翁は『愚直に生きる』の中で御陰であることを強調している。古里への思いの強い今朝吉翁の布施の思いは二重の意味で梅岩とか重なり合う。その他菩提寺に多大な寄進をし、吉井町の弥勒寺に釈迦三尊を寄進、先祖崇拝はもとより地域社会の安寧を願って鎮座している。これは富豪であるからという域を超えていると見ねばなるまい。長岡翁が本心にたどり着いたからに外ならないと見るべきであろう。ありべかりの心、本心を読み取ったからに外ならない。先の親方と共通性がある。ここまで来れば儉約は布施をとおして人類愛まで高められていると言っていいであろう。地球レベルで必要なのはこうした本心による布施以外にはあり得ないのではなからうか。

もう一つ布施の精神を生かしている企業を紹介しておこう。三重県に岡本工業がある。靴下を専門に製造している企業であるが、社是として『企業を通じて社会に貢献しつつ企業、社員の繁栄を図る』掲げ、

そのために至誠つまり真心を持ってお客にサービスしよう、スペシャリストになろう、和合つまり一丸となってお客にサービスしようを強調し、もちろん至誠が社是の基本であるが、その岡本工業が『碧巖録』を一万部刷って配布する計画を立てている。メセナを実践しているわけであるが、これは現代の布施の典型と見なしていいであろう。なおこの点については拙稿『梅岩と尊徳—布施と推譲』（『産業研究』43巻第1、2合併号、平成19年、『高崎経済大学付属産業研究所』参照）。

私事になって恐縮であるが、約40年も高崎経済大学に大過なく務めることが出来たのも暖かく育んでくれた天引の水、空気、人情つまり天引の風土の御陰であると考え天引の守護神諏訪神社になにか奉納したい旨を神主に申し出たところ、例えば五輪塔、幟を立てる支柱、あるいは記念の石柱、とくに天引には有名な麦祭があるので麦祭をあしらった石柱などが候補が挙がった。いろいろ話しあって神主が諏訪神社には狛犬を設置することが一番相応しいということになって狛犬を奉納することにした。これは布施と性格が異なるかもしれないが、近江商人が神社や仏閣に寄進する隠匿善事的に考えれば大きな布施と見なしてもいいのではないかと考えて奉納することにした。

- (32) 拙稿『生の経済学の提唱』『自然と実学』創刊号参照。日本東アジア実学研究会。2000年。この中で、次のように論じておいた。「生の経済学は、lifonomics の対象は、生きた生命体のぶつかり合いを究明するものでなければならない。これまでのように、物の合理性を追求するという狭い考えでは、とても生命体の持つ本質に迫ることは出来ないであろう・・・人間は人間の事しか考えなくなった。国富を増やすと云っても、人間に都合のいいように富を考えるようになったにすぎない。富はいかなる存在なのか。それは人間に都合のいいように解釈されているにすぎない。人間が物資を十分に享受できるように考えたのが、経済学である。・・・市民に商品を大量に安価に提供できる仕組みを考えることが経済学の使命と見なされた。人間のために、自然を限りなく効率的に利用する仕組みを考えることが、経済学の本来の役割であると考えられるようになった」。(43-45頁) 本論はこの延長線上にあることは言うまでもない。近代社会の論理が限界にきている今日、江戸時代の経済思想を追求することは、時代錯誤どころか近代を超えるために、何らかのヒントを与えているように思えてならないからである。